

第6回猪名川部会（2001.12.18開催）結果概要（暫定版）

庶務発信

開催日時：2001年12月18日（火） 17:00～20:00

場 所：大阪国際会議場 1003

1 決定事項

次回部会以降の日程が下記のとおり決定した

- ・第7回部会：1月18日（金）13:00～17:00
- ・第8回部会：1月27日（日）13:30～18:00
前半 一般からの意見聴取
後半 審議
- ・第9回部会：2月15日（金）15:00～18:00
- ・第10回部会：3月4日（月）17:00～20:00

2 審議の概要

第6回委員会（2001.11.29開催）の報告

これまでに委員から寄せられた質問に対する河川管理者からの説明

検討課題に関する議論～「治水」等に関する意見交換

治水に関する基本的な考え方として、主に総合治水の考え方、保水能力等について意見交換が行われた（3 主な意見 参照）。河川管理者より「用意できる資料は部会に提出したい」旨の発言があった。

住民意見の聴取・反映方法について

流域委員会で実施中の一般意見募集についての報告があった。

一般からの意見聴取

一般傍聴者3名から発言があり、うち1名からは併せて資料も配付された。

3 主な意見

<地球環境>

- ・地球環境保全のために、行政・事業者・市民が実践すべき方策を、河川の立場から考えていく必要がある。

<ライフスタイル>

- ・水の使い方を啓発してゆく取り組みや、ライフスタイルそのものを変えてゆくための取り組み

を今から実行する必要がある。

<パートナーシップ>

- ・ 流域全体の委員会だけではなく、余野川ダムといった個別の事業ごとに委員会を設置し、地元の方々とともに議論し、市民と行政が一体となって考えてゆくため仕組みを作る必要がある。

<洪水>

- ・ 猪名川の雨の降り方の特徴として局地的な集中豪雨が挙げられる。集中豪雨を評価する場合には、上流域での降雨量や被害データに加えて、下流域での降雨量や流量といったデータも出せば、流域全体の実態が見えてくるのではないか。
- ・ 猪名川流域では昭和 58 年以降豪雨を記録していないが、平成 7 年には神戸の新湊川で集中豪雨による洪水が発生した。今後も楽観はできない。そういった点からも、降雨確率よりも、雨倍率を基準にして考えることもあり得るだろう。
- ・ 洪水は場所によって発生確率も規模も違ってくるため、1 つの基準をもとにして河川整備計画を考えていってよいのか。今後、基準の見直しを含めて、検討する余地がある。
- ・ 想定外の洪水が発生した時のリスクマネジメントを河川整備計画に盛り込む必要がある。
- ・ 水田で積極的に貯留するならば嵩上げの必要があるが、農家の協力が得られるかが難しい問題である。
- ・ 東海豪雨のような雨の降り方、洪水について危機意識が低い。特に若い世代、子供たちが意識が低いのは問題。

<地震、津波>

- ・ 地震調査委員会によれば、南海地震の発生確率は、10 年以内は 10%未満、20 年以内は 20%程度、30 年以内は 40%、40 年以内は 60%、50 年以内は 80%、東南海地震の発生確率は、10 年以内は 10%程度、20 年以内は 30%、30 年以内は 50%、40 年以内は 70～80%、50 年以内は 80～90%となっている。
- ・ 河川整備計画には、地震にともなって発生する高潮・津波による水位上昇等の被害を想定した対策を盛り込む必要があるだろう。
- ・ 地震発生にともなう上流地域の土砂の崩壊が雨と複合すれば、土石流等が発生する可能性もある

<生物、生態系>

- ・ 河川の植物の一番の問題点である帰化植物を除去して、由来のはっきりした在来植物を植えること、自然の復元・回復といった点から考えても、大きな意味があるだろう

発言の詳細については「議事録」を参照下さい。